

新しい都市の姿

本記事は、平成25年1月に実施したインタビュー内容を取りまとめたものです。

「型」の文化と自然観、暮らしの中にある文化を次世代に

俳人

黛まどか 氏



- ▶ [人を惹きつける都市とは](#)
- ▶ [バーチャルな都市の時代](#)
- ▶ [「型」の文化と自然観、日本人のアイデンティティ](#)
- ▶ [東日本大震災と俳句、文化の力](#)
- ▶ [黛まどか氏 プロフィール](#)

人を惹きつける都市とは

成熟した、パブリックな意識のある街、パリ

—先生は沢山の海外の都市を歩いておられますが、特に心惹かれる都市を教えてください。—

パリは旅ただけでなくのべ2年生活したので印象深いところです。高飛車な美しさ、私は「美しきじゃじゃ馬」と呼んでいます。美しいけれども手に負えないところが魅力でもあります。私達の街の魅力が分かる人は来たら、といった感じの、誇りがあります。高飛車なのは理由があります。例えば、セーヌ川の遊歩道には柵がありません。夏など多くの人がピクニックをするので泥酔状態の人もおり、落ちた人をチェックするために、度々ボートがパトロールしていますが、柵を作ると美観を損なうので作らないのでしょう。地下鉄や街角にもエレベーター、エスカレーターが少

なく、美観を優先しています。フランス人に聞くと、この街に誇りをもっているのが不自由さとは引き換えだと言います。では、どうしているのかというと、車椅子やベビーカーの方が階段のところまで来ると、誰かしらが走り寄ってきて手伝います。一人一人がパブリックの意識をもっていて、それが結集し街としての意識になり、成熟した大人の街になっているということを実感しました。

一本裏道を歩きなさい

—人と国土ということが大きなテーマですが、住む人も一体となった全体が街の魅力ということでしょうか。—

俳句の世界では、一本裏道を歩きなさい、そこに詩があるといます。裏道を行くと、人の声が聞こえて、佇まいが見えてきます。昔は、小さいながらも庭があったり、植木鉢に朝顔を育てたり、夏になったら風鈴を吊したり、水を打ったり、そういう文化がありました。ところが、冷房の登場でそれらの文化がどんどん廃れています。水を打たなくても、風鈴を吊さなくても、朝顔を育てなくてもスイッチ一つで簡単に涼が得られます。一本裏道に、街の素顔があり、詩はそういうところにあるのですが、最近の日本はそういうところが雑になってきています。特に、日本人は四季の移ろいに心を寄せて、季節感をとても大切にしてきた民族ですが、味気ない暮らしになってきてしまっているのは残念です。

震災の半年前にドナルド・キーン先生と対談をした時に、70年間日本人を見続けてきて残念に思っていることが三つあるとおっしゃっていました。一番目が自然に対する繊細さ、暮らしの中に季節感が無くなってきていること、それから日本語の低下、三番目に新しいものへの好奇心が薄れて、物事を客観化してユーモアに変える力が無くなってきていること、とおっしゃっていました。特に若い人達にその傾向が顕著に見られ、私も今途絶えてしまうのではないかとというくらい危機的な状況だと思います。

バーチャルな都市の時代

バーチャルな都市、今を生きていない不安

—高度経済成長を目指して経済に力を入れてきたことも関係があるのでしょうか。御著書「引き算の美学」には、日本人が日本人たる所以は、高温多湿の気候と格闘し、その果てに美を見出してきた、自然観にあると書かれていますが、日本人の自然観は急速に損なわれてきているように思えます。—

都市はバーチャルです。空気も水も他の県が産出しているものを使わせてもらっています。全てキャッシュで解決し、自分が何によって生きているのかという実感が無いのだと思います。さらに、1日中家に閉じこもってネットの社会で生きていたら、本当に全てがバーチャルです。

最近、あちこちで「先が見えない不安」という言葉を聞きますが、先は見えないに決まっています。見えたらなおさら不安でしょう。先が見えない不安と彼らが言うのは、今を生きていない、その実感が無いという不安なのではないかと思います。

例えば教科書などもデジタル化される傾向にあるそうですが、一方で五感に訴える教育も取り入れるなどバランスをとっていかないと、どんどんバーチャルな世代が増えていってしまうことになる。今はまだ、年配の方がいらっしゃいますが、この後数十年経ったらバーチャル人間だらけになってしまいます。

インターネット句会と「座」の共有

—一方で、先生も携帯電話で句会を催されるなど、新しい技術も取り入れておられます。—

20年ぐらい前、インターネット句会というのが始まった頃、私は懐疑的でした。インターネットでは「時間」と「場」は共有できますが、句会は座を囲むもの。インターネットは「座」は共有できないと思っていました。

ある時山形で句会があったのですが、雪も多くお年寄りには夜の時間帯に参加できないでいました。すると参加者の一人が句会の結果を携帯メールで教えていました。これはツールとして使えるかもしれないと思い、石井威望先生に協力していただいてサイトを作り、最初に開いたのが「桜を詠む」というiモード句会です。同じ日の同じ時間に、沖縄から北海道までの会員さんが、それぞれの地方の桜の下に立って、サイトにお互いに句を送り合って選

をすると、結果が出るというサイトを作りました。掲示板も作りましたので各地からメッセージが飛び交いました。ところによっては満開だったり、花の雨だったり、花曇りだったり、花冷えだったり、二分咲きだったり、花吹雪だったり、あらゆる桜の季語が網羅されて、非常に面白かったものです。

もう一つ良かった点に、子育て中のお母さんや闘病中の方など、日頃句会に来られない方達が参加できました。現代ならではの新しい「座」ができたのです。ただ、元々顔を知っている者同志がというのが大原則だと私は思いません。今でも年に1回ぐらい開きますが、その間には、膝を交えて句座を囲み、初めてインターネット句会も健康的に成立すると思っています。

「型」の文化と自然観、日本人のアイデンティティ

ローカルに拘った街づくりを

—人口減少社会を迎える中でも、日本の首都が世界から人を惹きつけていくためには、何ができるでしょうか。—

グローバル化は仕方がないことですが、だからこそローカルに拘った街づくりをとことんやっていくべきだと思います。それから、日本人の細部への美意識というものを、もっともっと打ち出していくのがよいと思います。

私は「日本再発見塾」を主宰し、日本に埋もれた宝を掘り起こす活動をしています。昨年、飛騨高山で開催しましたが、例えば高山の古い街並みの側溝を作り直すのに、飛騨高山には地元でとれる非常に良い石があって、親子でやっている石工さんがいるのに、わざわざ輸入産の石材を使っています。地元の石は古くなくても独特の風合いを持ち、街並と馴染みますが、輸入産の石は馴染む前に汚くなっていきます。安価なので使っているそうです。コンクリートや安い輸入産石材、パネル石材に押され、地元の石工さんは仕事が無く、ぎりぎりのところで踏ん張っておられます。そういうことが日本中で起きています。だから、とことんローカルに拘るといことが大事だと思います。地産地消の街づくりですね。

日本の文化への誇りを

—地方都市ではなく、首都のような大都市は、どのようにローカルに拘り、それぞれの都市らしさを際立たせてゆけることができるでしょうか。—

パリの、ファーストフード店の拒否の仕方は大変なものです。子供たりとも染まらない、「私達はフランス人だ」、というあの誇りは、どう教育していくとあなるのだろうと思います。日本人にもそれに勝るとも劣らない文化があります。日本人がそういう誇りをもてないということが私は不思議です。むしろ、フランスの方が日本の文化を認めているほどです。あの自信とプライドを日本人ももってもよいと思います。

「型」の文化と自然観、日本人のアイデンティティ

—日本人は自分達の文化に今一つ自信をもっていないところがあるのでしょうか。街へのプライドや、古いものを守っていく意識は、どのようにしたら育まれていくのでしょうか。—

「型」の伝統文化を、お花でも、お茶でも、俳句も含めて、教えるべきだと思います。それから、自然を尊ぶ意識、和菓子でも、着物でも、必ず季節を写していますが、四季の移ろいを大切にすることを伝えていくべきだと思います。そうでないと日本人は根無し草になってしまうのではないのでしょうか。

「型」というのは日本人のアイデンティティだと思います。「型」は、理屈抜きで子供の内に身につけるものです。今、家庭ではお父さん、お母さんができない時代になってきてしまいました。義務教育で教える以外にはないと思います。

日本には、他国のような強い宗教がありませんが、それに代わるアイデンティティが「型」と「自然観」だと思います。

東日本大震災と俳句、文化の力

被災地で連綿と続く万葉集

—災害から逃れられない我が国で、災害を生き抜く上でも文化の力は大きいと思います。先生が最近東北で取り組まれていること、印象深かったことなどお聞かせいただけないでしょうか。—

東日本大震災後に寄せられた手紙がありますが、その方は津波を被ったその日から俳句を作っていたと書いておられました。40代の学校の先生で、ひたすら泥を掻き出しながら、気がつくつと俳句を作り、それが生きる支えになっていた、そういう方が一杯いらっしゃるそうです。阪神・淡路大震災の時にも被災地で沢山の俳句、短歌が作られ、多くの人を励ましたという話を神戸で聞いてきました。

もっと昔に遡れば、万葉集の時代にも地震も飢饉も噴火もあり、非常に厳しい自然環境の中で、人は深呼吸をするように歌を作ってきました。その時代に一般庶民が詩を詠んでいたというのは、他国ではあまり例が無いことと思います。機を織りながら、農作業をしながら、一般庶民が歌を詠み合っていたのです。深呼吸するように七五調にのせて思いを上へあげていくことで、苦しきから逃れ、思いを浄化し、昇華して明日に生きる力に変えていった、それが実は今も連綿として続いていたということ、私は被災地で目の当たりにしました。それまで私は、万葉集は古典とと思っていましたが、古典ではなく、あれは東歌であり、今ここで詠まれている。万葉集は、今でも日本人に続いている文化の厚いベースとしてあります。

しかも、皆さん自然を詠んでいます。仙台に住む30代の友人が、メールに「まどかさん、瓦礫の街の空に美しい星空が広がっています。僕がこれまでの人生の中で見た最も美しい星空です。」と書いていた。自然に打ちのめされた後で、自然が美しいと仰ぐ、その日本人と自然の揺るぎない信頼関係というのは、ずっと続いてきていると思います。それを詩に詠んでいくことで昇華し、浄化していくのです。去年3月にフランスの新聞の震災特集で、日本人は震災直後から俳句を作っている、「言霊の国」と書いてありました。そういう自国の尊い文化をもっと知り大切に引き継いでいく、それが街づくり、国づくりにつながっていくことになるのではないかと思います。

歌舞伎とか能を文化といいますが、あれは文化芸術というピラミッドの一番上のところで、一番下のベースのところは生活文化です。この部分が今とても危ういと思います。庶民一人一人の生活が雑になりグローバル化されて、日本人本来の、夏になったら風鈴を吊すとか、お客様が来る前には水を打つといった、とても丁寧に暮らしてきたものが無くなっています。この部分がやせ細ると上の部分もやせ細っていくと私は思います。俳句はその下の部分にあります。一般庶民の暮らしにある文化というのがとても大事で、それは学校と家庭の、或いはコミュニティの中で日々の教育により引き継がれていくのだと思います。

黛まどか(まゆずみまどか)氏 プロフィール

俳人。神奈川県生まれ。

2002年、『京都の恋』で第2回山本健吉文学賞受賞。2009年、東京文化会館にて初演のオペラ「万葉集(明日香風編・二上挽歌編)」の台本執筆、2012年NYにて初演の福島県の応援歌「そして、春～福島から世界へ」の作詞(共に、作曲:千住明)など、俳句に限らず幅広く活動。現在、「日本再発見塾」呼びかけ人代表、「国立新美術館」評議員、京都橘大学客員教授などを務める。

近刊に、句集『てっぺんの星』、随筆『引き算の美学』、編著『まんかいのさくらがみれてうれしいな』など著書多数。

国土交通省 国土政策局 総合計画課

大使館訪問記

本記事は、平成25年1月に実施したインタビュー内容を取りまとめたものです。

発展するミャンマーの新首都、ネピドー

ミャンマー連邦共和国大使館
駐日ミャンマー連邦共和国大使

キン・マウン・ティン 氏



- ▶ 首都移転の背景・目的、旧首都ヤンゴンの過密
- ▶ ネピドー選定の理由：国土の中心、土地取得の容易性など
- ▶ 新首都ネピドーの概要：計画と建設
- ▶ 旧首都ヤンゴンと新首都ネピドーの役割分担：議会及び全ての省庁はネピドーへ、ヤンゴンは経済の中心
- ▶ 将来ビジョン：商業ハブとしてのヤンゴン、行政都市としてのネピドー
- ▶ 日本へのメッセージ：末永い友好・協力関係の発展を
- ▶ ミャンマー連邦共和国大使館ホームページ
<http://www.myanmar-embassy-tokyo.net/> (新しいウィンドウで表示)

首都移転の背景・目的、旧首都ヤンゴンの過密

問：ミャンマーではヤンゴンからネピドーに首都を移転しましたが、その背景と目的について教示して下さい。

答：旧首都であったヤンゴンは密度が高くなってきており、場所的に狭くなってきたため、インフラの拡張、排水などの理由で、ヤンゴンからネピドーに移転しました。ヤンゴンの状況を説明することにより、より詳しい理由がおわかりになるかと思います。

ヤンゴン市は、1755年にアラウンパヤー王によってダゴンからヤンゴンという名前に変更されました。ヤンゴンの意味は、「ヤン」は敵、「ゴン」は克服するで、全ての敵を克服したという意味です。その後、イギリスとの戦争により1824年から下ビルマ¹はイギリスにより占領され、ヤンゴンはイギリスの政治、商業のハブとして発展しました。1885年には全ビルマがイギリスにより完全に占領され、ヤンゴンはビルマの首都になりました。イギリスはヤンゴンの開発に先進技術を取り入れ発展させ、私が読んだ参考文献では、20世紀のはじめには、ヤンゴンのレベルはロンドンに等しいと述べられています。

ヤンゴン市は、1950年と1980年の開発により、面積は230平方マイル(キロでは600平方キロ)に拡張されました。ヤンゴン管区は東西南北に地区が分かれています。また、ヤンゴン市内の区は33区あります。植民地時代からある建物は、ヤンゴン市内だけで200以上あります。

ヤンゴンの道路、上水、下水、電気、ゴミ収集システムは1962年から1988年までの間にかなり機能が低下しました。ヤンゴンの人口は500万人くらいまで増え、人口密度が高まることにより、交通渋滞、道路の破損、水道システムの不良などが発生しました。そうした状況に対応するため個人で井戸を掘ったり、下水も集中管理システムではなく個別に処理するような状況になりました。

ヤンゴン市を拡張するためには、土地の確保も必要ですし、また、ヤンゴン市の場合は雨期になると道に1、2フィートまで雨水が溜まります。そうしたことも新しい場所に移転した理由の一つです。歴代のヤンゴン市長も与えられた予算の範囲内で修繕等をしてきましたが、首都のインフラとしては十分なものではありませんでした。

もう一つの理由は、他の国、例えばオーストラリアではシドニーという大都市が海岸に近いところにありますが首都は内陸のキャンベラに、また、中国も海に近いところに大都市がありますが、北京に首都をおいています。ミャンマーも同様に内陸に首都を移転しました。

¹ビルマ(ミャンマー)の歴史的、地理的区分で、南部沿岸地域及びベンガル湾及びアンダマン海に面したデルタ地域。(上ビルマの反対。)タニンダーリ管区域(旧名テナセリム)及びラキン州(旧名アラカン)を含む。

ネピドー選定の理由: 国土の中心、土地取得の容易性など

問: ネピドーを首都の移転先として選んだ理由は何でしょうか。

答: ネピドーの名前ですが、英語でRoyal Capital(王の都)という意味です。ミャンマーの歴代王朝は、首都としてマンダレー、タウンゲー、バガンといった行政を行いやすいところに移転したという歴史的背景があります。これと同じようにネピドーはヤンゴンから320km北にあり、ピンマナにも近く、また、王朝があったタウンゲーにも近いのです。ネピドーはタウンゲーとマンダレーの間くらいのところ、地理的にも東西南北への行政の業務を行いやすいように国土の中心に位置しています。

また、周辺では農業が盛んで、それ以外にも電力、水道などの機能も十分供給できます。パウラン、イエジンの2つのダムがあり、パウランダムは水力発電により280メガワットの電力供給能力があり、イエジндаムは灌漑用です。南北へ移動する際にもヤンゴン～マンダレー間の既存道路の真ん中ぐらいいあることから、北はメークティラやマンダレー、西はタウンドウインジー、マグウェ、東はシャン州のピンランなどの地域にも容易に移動することができ、交通上非常に便利です。また、ネピドー地域内の地形も、平野もありますが、ちょっとした坂もあり水が流れやすく、この点は、ヤンゴンとは対照的です。

ネピドーの面積は7,054平方キロと広大な土地です。このような、広大で風光明媚な土地は、ヤンゴン付近ではなかなか確保できません。この広大な土地に、省庁などの地区、住宅地区、ショッピング地区、レクリエーション地区—例えばゴルフ場などの施設があります。また、宝石美術館や、宗教関係施設もあります。ミャンマーで有名なシュエダゴオン・パゴダに似たパゴダがあります。シュエダゴオン・パゴダより1フィート低いのですが、その高さは325フィートあり、ネピドーの一つのランドマークになっています。先程申し上げた通り、ヤンゴンはこれ以上拡張できないということがあり、全ての条件が揃っているこの土地を選んだのです。

新首都ネピドーの概要: 計画と建設

問:ネピドーの計画や建設経緯などについて教えてください。

答:ネピドーは、連邦地域²として建設されました。その連邦地域の中には8つの既存の区も含まれています。

2001年に計画を策定し、2005年に第1期の建設、2008年に第2期の建設が完了しました。先程もお話しましたが、ネピドーの面積は、約7千平方キロですが、周りにある区と合わせ、その人口は92万5千人になります。ネピドーの中もいろいろな地区に分けられています。その中に国際地区というのがあり、その面積は4.9エーカー、約2ヘクタールあります。計画では、この地区の中に、大使館などが立地します。先日、バングラデシュ首相のミャンマー訪問に際して、この国際地区の中に大使館の土地を確保し、建設を始める式典を行いました。

ネピドーの中には主な区が4つあります。病院、駅、さらに、イエイゼン農業大学、林業大学、獣医大学の合計3つの大学があります。ヤンゴン、ネピドー間の道路ですが、8レーンの高速道路で、長さは323.5kmあります。それからネピドー内の道路は、最大で片側10レーンあり、将来を見込んで幅広くつくってあります。

ネピドーへの移転は、まず、国軍司令部が2005年に移転し、同じ年の11月に11の省が移転しました。首都の建設を開始したのは2002年です。25社の企業により建設が行われました。

² 連邦地域とは、ミャンマー憲法(2011)で他の州・管区と並記されているが、自治体ではなく、大統領が直接統治するとされている。

旧首都ヤンゴンと新首都ネピドーの役割分担:議会及び全ての省庁はネピドーへ、ヤンゴンは経済の中心

問:ヤンゴンとネピドーの役割分担はどのようにされているのでしょうか。

答:ミャンマーの全ての省がネピドーに移転しました。国会議事堂もネピドーに新しく建設し、移転しました。元の国会議事堂は、現在ヤンゴン管区の議事堂として利用しています。各国の大使館はヤンゴンに残っています。ただし、先程お話したように、バングラデシュ大使館の新しい建物はネピドーで建設中です。商業機能もヤンゴンに残っていますが、これからミャンマーに進出し、投資しようとする企業はネピドーに支社、事務所を開設しています。例えば、ある日本の総合商社はネピドーに事務所を設けています。

先程、全ての省がネピドーに移転したとお話しましたが、ある省の場合は業務の都合上、移転できない部署もあります。例えば、ミャンマー運輸省の航空局、港湾局などの部署はヤンゴンに残してあります。港湾局の場合は、海外から来る船のヤンゴン港への出入国管理業務もありますし、航空局の場合も同じくヤンゴン空港の管理などを行っているということで、ヤンゴンに残してあります。また気象関係の機関は、世界の気象機関と連携をしているので、ヤンゴンから移転しておりません。同じく、中央銀行の建物はネピドーにありますが、中央銀行の機能は、まだヤンゴンに以前の中央銀行の場所に支局という形で残しています。ほとんどの民間の銀行もヤンゴンにおかれています。それから、工場及び工業区もヤンゴンに残っています。

ネピドーとヤンゴンの役割分担の考え方ですが、全ての行政管理はネピドーで行い、その指示を受けて実施する部分は、ヤンゴンなど他の市が実施しています。大統領府、大統領官邸、副大統領のオフィスと官邸、議長公邸などもネピドーにあります。公務員の官舎も4階建ての建物で1,200戸分つくりました。これからも、一層増えていくと思います。ネピドーには国際空港も整備されています。

将来ビジョン:商業ハブとしてのヤンゴン、行政都市としてのネピドー

問:現在の、ネピドーへの首都移転への評価と、今後のビジョン・見通しについてお話し下さい。

答:基本的な枠組みとしては、快適さ、クリエイティブ、健康的、知能的、ケアフリー、美しい都市計画、農村、地域、環境を基本として、将来に向けた政策を進めていくことにあります。将来の見込みですが、ヤンゴンは商業的なハブとして発展を続けていくと思います。今後30年間かけて、ヤンゴンの拡張計画を進めていくことになっています。

今年、2013年には「第27回東アジアスポーツ大会」が首都ネピドーを中心にミャンマーで開催されます。このようにネピドーは将来の国の方針による知的な社会資本としての文化の発展と、環境政策を取り入れた都市として、今後も発展し続けていくと思います。

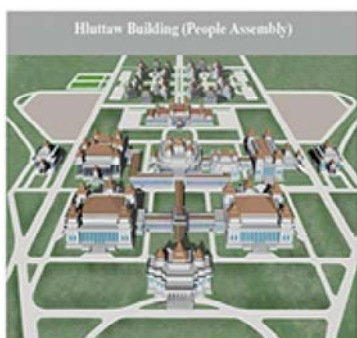
日本へのメッセージ: 末永い友好・協力関係の発展を

問: 大使から、ミャンマーと日本の今後の友好関係、アジアの共存共栄と発展のためにメッセージをいただきたいと思います。

答: 日本とミャンマーの友好関係は長い歴史があり、あたたかい関係にあります。ミャンマーの独立運動の際にも支援をいただき、その後も様々な協力をいただきました。現在、ミャンマーは民主化への道を歩んでおりますが、民主化への道でも日本はリードをしています。これから経済支援と協力、日本からの投資、技術協力の受け入れなども今後進めていく予定ですし、現在既にスタートしております。この機会に、ミャンマー国民を代表して、日本政府、日本の国民の皆様にご挨拶を申し上げます。今後も、日本との友好・協力関係が末永く発展することを祈念します。



((c)Esri, DeLorme, NAVTEQ, TomTom, Intermap, increment P Corp, GEBCO, USGS, FAO, NPS, NRCAN, GeoBase, Kadaster NL, Ordnance Survey, Esri Japan, METI, swisstopo, and the GIS User Community)



連邦議会鳥瞰図

(出典:ネピドー開発委員会資料)